

ミクロ社会学への転換 ——アメリカ社会学の展開——

濱 田 勝 宏*

The Transition from Macro-Sociology to Micro-Sociology ——Some Developments in American Sociology——

Katsuhiro Hamada

要 旨 都市的生活構造を手がかりに、現代社会を分析しようと試みるなかで、生活関係構造と生活文化構造とを現代都市に照合する作業の必要性を痛感することとなった。そこで、都市理解のための理論的系譜を都市社会学の初期にさかのぼることから始め、再びアーバンイズムの検討する作業にも、少なからず時間を要した。しかし、そのことは、シカゴ学派社会学の古典を再読することと、マクロ社会学だけでは理解できない局面のあることを、今さらながら認識させられることとなった。すなわち、生活関係構造と生活文化構造がおりなす各種の現象は、一方において、ミクロ社会学の援用を必要とするということである。その結果、G. ジンメルに、またC. H. クーリーに戻って、人間の行為の内的世界とそこに成立するミクロ社会を先達の解釈の応援を得て進めている。本稿は、シカゴ学派社会学とG. H. ミードに焦点をあてつつ、彼の社会的自我の形成に関する理論の枠組を抽出することとした。特に、コミュニケーションに関する彼の捉え方は、難解で不明確な部分がないではないが、服装の社会科学としての服装社会学へも、再導入の必要性があることを述べた。

1. はじめに

現代日本の社会を社会的に把握することを試みる方法として、現代日本の核家族を窓に、そして社会構造変動の裏面ともいべき都市的生活構造の各要因における変化と問題点を抽出することを採用してきた。特に、生活関係構造に論及するに際し、シカゴ学派都市社会学の古典を再読しつつ、ややもすると古典として退けられがちな核心部分の再検討に若干の時間を費やした。そのこと自体は、時代差や都市文化の生成過程の相違という難問を内包するものではあったが、決して徒勞ではなかったと思われる。それどころか、シカゴ学派都市社会学の成

熟期は、アメリカにおける大衆消費社会の成立過程に符合するものであったことを考慮にいれると、現代日本の大衆消費社会の状況を検討するにあたって、きわめて有効なものであった。つまり、敗戦を経て社会的経済的復興の助走期、そして高度経済成長への離陸期、そして急速に大衆化が進む状況を基盤に大衆消費社会の到来に直面した我が国は、アメリカ社会の都市住民が20世紀初頭から前半の時期に経験したであろうものの数々を、追体験したといっても過言ではない。それらの説明概念のひとつが、L. ワースのアーバンイズムであったし、都市と地域と家族のネット上で展開される人間関係の構造、すなわち生活関係構造に関する考察のうえでも有効であると理解できたことは収穫であった。ただ、このような検討作業を進める過程で、特に生活文化構造という要因をとりこもう

* 本学教授 社会学

とする段階で痛感するようになったのは、これまでの視角として採用してきたマクロ社会学の限界であり、何らかの補完的視角の必要であった。これは、マクロ社会学の責任というよりは、検討しようとする者の限界をようやく明るみに出したということに過ぎないとみなければならぬ。すなわち、生活文化構造という要因と述べたが、このことについては、例えば服装社会学における都市空間での着装行動や流行の採用といったことに言及する際に必要となるという認識につながる。都市空間における着装行動や個人が流行にどのように追随するか、あるいは積極的採用にふみきるかなど問題は、長らく社会構造の変動という側面から、都市社会学の知識を応用することによって、説明されてきた。しかし、着装行動なり、流行の採・不採といった個人間の価値観や心理傾向に大きく支配されがちな行為（それは、大部分が相互行為と捉えるべきである）について分析する場合には、マクロ社会的な社会構造の変動やそれに派生する旧来型の社会心理学だけでは不十分であるといわねばならない。つまり、補完的視角を提供するものとして、マイクロ社会的な捉え方を導入することの必要性を痛感することとなった。

都市的生活構造における内部的要因としての生活関係構造と生活文化構造は、一對の分析的枠組として、人間関係と都市空間に展開される文化との絡みを明確にするという意味で、きわめて都市社会学的である。そして、シカゴ学派の初期的理論が、生態学的分析であったり、アーバンイズムの展開にエネルギーを注入するものであったように、マクロ的であったことも手伝って、生活関係構造と生活文化構造という局面で論及する場合でも、当面はマクロ社会学にならざるをえなかったことは否めない。しかし、都市が地域社会の機能的低下（場合によっては、機能不全、そして解体）という危機的状況に直面するようになったとき、実際、都市住民はそれをそのまま放置しようとしているのか、地域集団や地域の企業は、そして、行政

は、ただ手をこまねいているだけなのか、という見直しがなされるようになった。つまり、再び都市を個人や家族の側から見る方法を導入することの必要性が浮上したのであった。これは、マクロ的な都市社会学が見落しがちなものを、立場と視点を変えて捨てることに他ならない。このことは、いきおいシカゴ学派の初期的な都市社会学の限界を指摘することにつながりかねない。そして、ネオ・シカゴ学派への傾注だけを是とする考え方も多いのが実情である。ただし、先に述べたマイクロ社会的視角の導入という文脈で、G. ジンメル、C. H. クーリーなどを再読してみると、都市問題に言及する際の潮流が明確に確認できるのであって、それ自体が初期的な都市社会学に継承されていることを看過すべきではないのである。要は、シカゴ学派の初期的先達の労作をいかように解説するか、彼らの論理的な文脈を紙背において理解しようとするか否かの問題であると思われる。かといって、ネオ・シカゴ学派の理論とその価値が、減ぜられるものでないことはいうまでもない。

周知のように、シカゴ学派社会学は、都市社会学の形成と発展だけに終始したわけではない。現代の社会学的潮流でみても、今日なおシカゴ学派が我々に与える影響力は大きいし、古典的と称されながらもさまざまな角度から検討がなされていることも事実である。特にシンボリック・インタラクショニズムに関しては、まさにその通りである。以下、C. H. クーリーの潮流をひきついだシンボリック・インタラクショニズムのシカゴへの移植の過程をふりかえり、先に述べた服装社会学の一課題との関連を検討するという意味で、その後のアメリカ社会学の展開へと迂回してみようと思う。

2. G. H. ミードの帰国

1888年、ハーヴァード大学を卒業したG. H. ミードは、かねてから心理学を専門的に学びたいと考えていたこともあって、ドイツのライプ

ツィヒ大学へ留学することになった。彼は、同大学で W. ヴントなどの講義に出席したあと、翌年にはベルリン大に移り、W. デルタイヤ J. エビングハウス（心理学）などの講義を聴講した。そして彼は、1891年にミシガン大学哲学・心理学科の講師として奉職することとなり、帰国したのであった。

ミシガン大学哲学・心理学科には、J. デューイが在職していたし、1892年には C. H. クーリーが加わることとなった。G. H. ミードは、この二人の学者・教育者との交渉を通じて、自身の学問的広がりとは独自の理論を樹立することになる。特に J. デューイとの40年間に及ぶ交友は、双方ともに多大な影響の交換でもあった。G. H. ミードにとっては、J. デューイのプラグマティズム哲学の影響をいやがうえにも受けたのであり、自身のシンボリック・インタラクショニズムの生成にははかり知れない力となったとされている。この点の指摘はしばしばなされるところであるが、見逃してはならないと思うのが、C. H. クーリーとの親交である。C. H. クーリーが、人間の自我を他人や社会との関連で明らかにしようとしていた方法に、影響を受けたとされる。「ミードはまた、ミシガン大学のスタッフである社会学者の C. H. クーリーとも出会い、その影響を強く受けて、自我の社会性について関心を深めた。彼らは人間の自我を単なる生物学的構成物ではなく、社会から生じてきたものと考えていた。そして、ミードは自我の社会性を表現するクーリーの『鏡に映った自我』(looking-glass self) の概念や共感によって他者を理解しようとする『共感的内観』(sympathetic introspection) の方法から学んで『役割取得』による自我形成論を展開した」(注1)。

C. H. クーリーは、後に、いわゆる彼の三著作を出版する。それは、「人間性と社会秩序 Haman Nature and the Social Order 1902」, 「社会組織論 Social Organization: a study of the larger mind, 1909」, 「社会過程 Social Process 1918」である。これらを通じて第一次

集団や鏡に映った自我の概念を展開し、社会と自我形成との関係を論じたのであるが、後に、G. H. ミードが「主我と客我」という考え方を展開するのに少なからぬ貢献をしている点は見逃すべきではない。

C. H. クーリーは、F. テンニエスのゲマインシャット概念に相当するものとして、第一次集団 primary group の概念を用意した。第一次集団は、よく知られる通り、「われわれ感情 we-feeling」と「フェイス・ツウ・フェイス face-to-face」の関係によって形成される人間にとっての基礎集団である。したがって、個人は、第一次集団における人間的な交流、すなわちコミュニケーションと、心理的なつながりとしての一体感を通じて自我を意識し、形成し、社会化を果たしていくことになる。そして、「自我と社会とは、共通の全体がもつ両面として、ともに進行する。私は自分自身を意識しているのと同じように、直接かつ確実に自分が生活している社会集団を意識している。そして、デカルトが『ワレ想ウ』と言ったのと同じ根拠に立って、彼はこう言ってもよかつたのではないか。『ワレワレ想ウ』と。」という名言を残しているのである(注2)。「われわれ感情」に支えられる第一次集団は、顔と顔とをつきあわせている親しい結びつきと協力によって特徴づけられる。そして、彼は「主として個人の社会性と理想を形成するうえで基本的であるという点において第一次的なのである」と強調したのであった(注3)。このような C. H. クーリーの所論は、G. H. ミードが後に「精神・自我・社会 Mind, Self, and Society, from the standpoint of a social behaviorist 1934」で展開する論旨に多大の影響を与えているといつてよい。もっとも、G. H. ミードは、ミシガン大学には在職3年で別れをつげたので、C. H. クーリーとの直接的な交換は、やや遠のいてしまうことにはなるが、アメリカ社会学会 American Sociological Association で互いに中心的役割を担う中で学問的交渉は滞ることはなかったようである。

1894年、J. デューイがシカゴ大学に新設された哲学科の主任教授に就任するのにもなつて、G. H. ミードも同学科の助教授としてシカゴ大学に迎えらるることとなった。その後、37年間、シカゴ大学に在職し、プラグマティズムをベースにおいて、研究と教育の生活を送った。1931年、彼は再びJ. デューイにしたがつて、コロンビア大学に移籍することになっていたが、突然、この世を去る結果となった。ミシガン大学を含めて40年間にわたるG. H. ミードの業績は、今日、我々にとってシンボリック・インタラクショニズムの学祖としての意味をもつものである。C. H. クーリーが、社会学の世界に心理学の考え方を導入したとすれば、G. H. ミードは心理学の世界に社会学の視点を植えつけた人であったといえよう。若き日に彼は、ドイツで本格的に心理学を学ぼうと志したのであるが、ミシガン大学の招きがあったとはいえ、心理学の研究という意味では志半ばにしての帰国であった。しかし、そのことが、J. デューイのプラグマティズム哲学との接点を用意し、C. H. クーリーなどの社会学理論との交渉を可能にする結果をもたらした。したがって、シンボリック・インタラクショニズムの成立という意味では、まことに歴史的な意義を与えたG. H. ミードの帰国なのである。

3. シンボリック・インタラクショニズムの基本

G. H. ミードは、68歳で世を去るまで、今日、我々が接する形での出版物を残していない。先に述べた「精神・自我・社会」が、C. W. モリスの編集と序言によって出版されたように、今日、彼の著作とされるものは、講義ノートの編集や論文の集成などによるものである。The Individual and Social Selfにいたっては、D. L. ミラーの編集によって1982年にシカゴ大学出版部から出版された。この出版をもつて、ようやくG. H. ミードの論理的体系が、全体像を今目的に明らかになることとなった。

G. H. ミードの業績が全体像を明らかにすべく、著作または著作集として刊行されるに及び、今日の我々からみても、彼の視野の広さ、そして関心の広さは、さすがに驚嘆させられるものである。遂次、邦訳も増えて、今日では、G. H. ミードとの距離はきわめて近接したものとなっている。そして、それらの中で基本的なものとして、研究者の注目を集めてきたのが、他ならぬ「精神・自我・社会」である。

彼の分析は、それまでの心理学が取扱ってきた行動に関する分析を個人と社会との関係枠において捉えようとする方法への転換によって始まる。彼のその点に関する捉え方は、「社会行動主義」として知られるが、彼は冒頭において、それまでの行動に関する捉え方に個人と社会、個人と社会集団との接点における経験に含まれる重要性が見落とされるという欠点があることを指摘する。行動主義と称するそれまでの認識に修正を求める提案をしたうえで、「行動それ自体の内部に分野があり、それは外的ではなく、その行動に所属しているのであり、また、そこには、内的、有機的行為の諸特徴があり、その諸特徴がわれわれ自身の態度のなかに自らを表わし、特に言語と結びついた態度のなかに自らを表わすのである」(注4)。人間の行動についての心理学的な捉え方は、それまで、J. B. ワトソンに負うところ大であった。つまり、ワトソン流の動物心理学による行動理論、当時の行動主義の考え方が、ほぼ一般的であった。G. H. ミードは、この点の修正を考えたのであった。そして、「われわれは言語に、表現されるべき内的意味の観点からではなく、信号や身振りの手段によって行われる集団内での協同という、より広い文脈から接近しようと考えている。意味は、この過程のなかで現われる。われわれの行動主義は、社会行動主義である」を宣言している(注5)。この辺りは、ワトソンが、人間の行動や心理現象に関して、条件反射やそれと類似の生理学的メカニズムを説明要因として掲げていることに対する批判にもなっている。

このような社会行動主義にあって、社会的自我形成のメカニズムを明らかにしようとするのが、その後の論旨ということになる。彼は、ドイツ留学の折、ライプツィヒ大学で、W. ヴントの指導を受けた。それらの経験から、それまでの心理学が説明してきた人間の行動について、再び論じている。その過程でとりあげたのは、ジェスチャー、模倣、コミュニケーションといった説明概念であった。それらについてのW. ヴントやワトソンなどの所論に関して、社会行動主義の立場から、批判的な考察を進めるなかで、彼は、「有意味シンボル」という概念を提示する。有意味シンボルとは、他者にも自己にも同一の反応を引き起こすような言葉やジェスチャーを指すのであるが、人間のコミュニケーションにはこの有意味コミュニケーションが介在するという点で、動物のコミュニケーションとは大きく異なる。「シンボルは、個人のなかに、他者のなかに呼び起こすのと同じ反作用の集団を呼び起こすが、それが有意味シンボルになるには、そのなかにさらになにかが含まれる。『椅子』または『犬』というような言葉に対する、ある個人のなかのこのような反応は、その個人にとって反応であると同時に刺激でもあるような反応なのである。もちろん、これが、我々が事柄の意味、またはその有意味性と名づけるものに含まれていることである」(注6)。すなわち、個人の他者に対するコミュニケーションを成立せしめる要因としての有意味シンボルは、継続的な人間関係や社会集団の基本部分をなすであろう社会的経験の蓄積に重要な機能を果たすという訳である。そして、最終的には我々にとっての精神ないし知性といったものの成立は、以下の通りに解釈できる。つまり、「精神または知性の進化論的出現は、経験と行動の全社会過程が、そのなかに含まれている分離した個人の経験のなかに持ち込まれたときに、また、この過程への個人の適応が、彼がこうして手に入れた、過程についての自覚または意識によって修正され、洗練されたときに起きる」(注7)。また、この有意味シンボルに

もとづくコミュニケーションによって、人は意味のある他者の存在を知り、意味のある他者との関係において役割取得をなす。このことが、社会的に自我を形成する点でのポイントになる。「自己意識は、社会的個人の周辺に明確に組織化されているが、それは(中略)人が単に社会集団のなかにいて、他者によって影響され、また他者に影響しているからだけではなく、(中略)自我としての彼自身の経験が、彼が他者に向けた彼の行動から受け継いだ経験だからである。彼は他者の態度を取得し、彼自身に対して、他者が行なうように行動する限りで、自我になる」(注8)。

このようにして形成される自我には、G. H. ミードの名を高からしめた論述である「主我(I)」と「客我(me)」の両面がある。彼によれば、人間の自我に含まれる二つの側面が主我と客我であるが、そのうち客我とは他者の期待を受け入れるものであり、主我とは、一方でその客我に対する反応である。換言すれば、主我は人間の主体性を示し、客我は自我の社会性ということになる。自我はこの客我と主我とのかかりによって成立するものであるから、主我は人間の個性や独自性、また創造性や主体性を示すものである。そして、この主我と客我の存在は、人間のいわゆる「内的コミュニケーション」に通じるものである。「ミードは、意味のあるシンボルによるコミュニケーションの果たす役割を検討して、共有意味世界、社会性の成立を明らかにしたが、さらに『内的コミュニケーション』の存在をクローズ・アップして、それが既成の意味を越えて新たなものを創出する過程を解明している。人間のコミュニケーションは外的なコミュニケーションのみならず、自己自身との『内的なコミュニケーション』によっても成り立っている。人間は意味のあるシンボルを通じて他者と会話するとともに、自己とも会話を行なう」(注9)。

G. H. ミードは、シカゴ大学へ移籍してから、専ら哲学科で講義を担当したのであるが、彼の講義には多数の社会学科学生が聴講に来て

いたといわれる。このことは、シカゴ学派社会学に少なからず影響を与えたことを意味するものであった。事実、彼は、R. E. パークなどの社会学科のスタッフとも、緊密な関係をもったし、パークをはじめとする都市社会学者の面々に対して、大きなインパクトを与えた。その意味で、G. H. ミードは社会学科にとってイデオログ的存在とさえいえるのである。そして、これらの積み重ねが、後にシンボリック・インタラクショニズムの成立へとつながるのであるが、その点の明確な認知は、H. ブルーマーの奮闘をまたねばならない。ただ、人間と社会の関係を理解する方法として、有意味シンボルの介在によるコミュニケーションを明確に指定するとともに、自己と他者による外的コミュニケーション、主我と客我による内的コミュニケーションに分解して考えたところに、彼の社会観のみならず基本的な人間観が明示されている。そして、そのことは、有意味なシンボル、有意味な他者との関連での役割取得という個人と社会との対等な関係の理解ができるという方法の発見につながっている。これは、後にH. ブルーマーらが、機能主義社会学への批判を含めて樹立するシンボリック・インタラクショニズムの源泉になる考え方である。

G. H. ミードらの社会学の潮流は、その後の社会学研究の方法論に関する論議を活発なものにし、また、多士済々の学者群の創出を促すとともに、いわゆるアメリカ社会学の展開に大きく貢献したといえる。

4. 「主我・客我」と服装社会学

先に、G. H. ミードの自我の捉え方にふれた。そして、その重要な説明要因に主我と客我があることにもふれた。彼は、「精神・自我・社会」の中で、主我と客我を説く際に人間と動物の相違を明確にするよう事例をひいている。これは多分に、ワトソンの理論を批判的に検討するうえでやむをえぬ選択であったと思われる。その彼が、一方で流行に対する人間の関わ

り方に言及している箇所がある。これは、彼としての流行理論の展開ではない。むしろ、社会の中における自我の表れ方とその変化を説明しようという試みにはかならないのであるが、たまたまではあるが、その捉え方は、服装に関して社会学的な関心をもつものとしてはきわめて示唆的である。いささか長くなるが、以下、引用する。「新しい流行に対する、人びとの態度をとりあげてみよう。それは、最初は反対という態度であるかも知れない。しばらくたつと、彼は陳列窓のなかの洋服に注目し、それを着ている自分をみることで、この変化した流行のなかにいる自分自身について考えるようになる。彼はそれに気づかないが、彼のなかで変化が起きたのである。したがって、それによって、他者と相互行為する人間が、不可避免的に、同じことをする他者と似るようになる過程——この過程が、いわゆる意識のなかに現われることなしに——が存在するのである。我々が明確に、他者の態度を取得したとき、我々はこの過程を意識するようになるが、この状況はそれ以前の状況から区別されなければならない。恐らくある人は、自分はある特定の流行の衣装を気にかけていない、ただ皆と違った衣装を好むだけだといふかもしれない。そのときでも、彼は、自分自身に対する他者の態度を、彼の自らの行為のなかで取得しているのである」(注10)。G. H. ミードは、自我における主我と客我の存在を説明するために、また、内的コミュニケーションの一般的なあり方を例示するために、流行に対する個人の対応を用いたに過ぎないであろう。しかし、第2の皮膚といわれる衣服を着装した人間にとって、服装それ自体は外的コミュニケーションのための媒体である。また、それは、自己の好みや感性、そして個性を表現しようとする内的コミュニケーションの契機ともなるものである。そして、服装の様式やトータルな着装のコンセプトの変化、視覚的に新しさと変容を感じさせるデザインのプレゼンテーションは、ここでいうところの服装の流行である。したがって、服装に内在する内的小および外的コ

コミュニケーションの媒体としての機能は、流行との直面という事態において、ゆるやかに、また激しく動揺することを余儀なくされると考えてよい。つまり、主我と客我のコミュニケーションが、次なる衣服の選択をめぐる、あるいは流行現象が提示する着様式の変更に対する態度の決定をめぐる、機能するといわねばならない。この点は、G. ジンメルが、自己表現の欲求と同調の欲求の同時的充足とした、一見、相反する流行への態度の存在と指摘したことと通じるものがある。G. H. ミードは、流行の影響を受けないと主張しているつもり人間が、一面で自己の個性や主体性を強調するかたわらで、自分自身に対する他者の態度を、彼の自らの行為のなかで取得しているとする。これは、後に、G. H. ミードが、自己意識を用いる過程における自我としての個人の認知が、個人に自己主張の態度や、共同体に対する献身の態度を与えるとしたことと同義である。この自己主張の態度と共同体に対する献身の態度は、個性の主張と集団や周囲の人々への同調を求める欲求を意味するものと解釈できる。その点で、この二分とそこにみられる相補性は、G. ジンメルが述べたことにほぼ共通する。そればかりでなく、社会的自我の形成が、生命体として有機体として行動主義的に説明されることから脱して、いわゆる社会行動主義の立場から、個人（自我）と社会の関係において捉えられなければならないとした点で、ミクロ社会学の進化を示すものでもある。

一方、流行に対する態度をたまたま題材にしたとはいえ、個人と服装と社会という枠組でのミクロ社会的な捉え方の重要性を指摘している点は、見逃すべきではない。服装の社会科学としての服装社会学は、服装における社会学的側面と心理学的側面の両面から考察の眼を向けることを当初から提唱してきたことは事実である。そして、G. ジンメル、H. ブルーマーらの考え方を利用して、流行の分析に役立ててきた。しかし、それらの導入の動機は、結局のところ、社会現象としての服装の流行を社会構造

の変動要因のひとつとみたり、その結果として流行が個人の行動や心理に及ぼす影響をもたらすかという意味で規範的パラダイムでの理解に傾いていたことは否めないと思う。その点で、G. H. ミードの所論の応用が、服装に関する分析、服装の流行現象をめぐる個人と社会との関係に関する解釈に、これまで以上に積極的でなければならないだろう。

服装、ファッション、衣生活と並べると服装をめぐるさまざまな局面が去来する。そしてそれを、自我を有する個人がその肉体にまとう一着の衣服を通じて、他者や社会に連なっているという現実には、G. H. ミードが展開した思考の過程に合致させることができる。また、ファッション、流行現象に関する考察の際、基本的に衣服（着装された状態での服装）におけるシンボル性とか、そのシンボルを媒体としたコミュニケーションのプロセスなどは、これまでも検討されたことではあるが、体系的な理解を可能にするほどのまとまりを見せるものとはなっていない。

偶然の例示をとりあげて、服装社会学の研究におけるシンボリック・インタラクショニズムの基本的な考え方の有用性に、迂回してしまった。しかし、これも広い意味での社会学のパラダイム革新であり、服装の社会科学における深化への方向性の明示でもあると思うのである。C. H. クーリー、G. H. ミードと再読の作業が、ミクロ社会学への転換に効果的であると判断する一方で、シカゴ学派社会学をはじめとするその後のアメリカ社会学の展開は壮大である。それぞれの理論はもとより、分析的枠組の再考もさらに必要というべきであろう。

引用文献

- 注 1) 船津 衛「ジョージ・H. ミード—社会的自我論の展開—」(東信堂、東京、p. 20-21 (2000))
- 注 2) C. H. クーリー、大橋 幸、菊池美代志訳、「社会組織論—拡大する意識の研究—」(青木書店、東京、p. 11 (1970))
- 注 3) C. H. クーリー、前掲書、p. 24

注 4) G. H. ミード, 河村 望訳「精神・自我・社会」(人間の科学社), 東京, p. 15 (1995)

注 5) G. H. ミード, 前掲書, 同上

注 6) G. H. ミード, 前掲書, p. 94

注 7) G. H. ミード, 前掲書, p. 167

注 8) G. H. ミード, 前掲書, p. 211

注 9) 船津 衛「アメリカ社会学の展開」(恒星社厚生閣), 東京, p. 113 (1999)

注10) G. H. ミード, 前掲書, p. 237-238